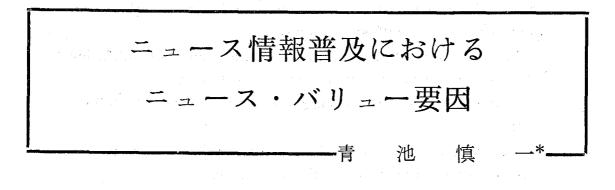
慶應義塾大学学術情報リポジトリ Keio Associated Repository of Academic resouces

Reio Associated Reposit	ory of Academic resouces		
Title	ニュース情報普及におけるニュースバリュー要因		
Sub Title	News value factor in the diffusion of news information.		
Author	青池, 慎一(Aoike, Shinichi)		
Publisher	三田 哲學 會		
Publication year	1981		
Jtitle	哲學 No.73 (1981. 12) ,p.79- 100		
JaLC DOI			
Abstract			
Notes			
Genre	Journal Article		
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000073- 0079		

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

哲 学 第 73 集



News Value Factor in the Diffusion of News Information.

Shinichi Aoike

News information diffusion Process has been investigated in a variety of settings and in regard to various types of news since 1945 When Delbert C. Miller investigated the flow of the death of Roosebelt in a college Population.

For example, Otto N. Larsen and Richard J. Hill investigated the diffusion of news about the death of Senator Robert A. Taft. Richard J. Hill and Charles M. Bonjean, and Bradely S. Greenberg examined the diffusion of news about the Kennedy Assassination. M. Timothy O'keefe investigated the diffusion of the knowledge of the frist human heart transplant among doctors.

Asgar Fathi investigated the diffusion of the news of marriage of Prime minister Trudeau in Canada. Kenneth G. Sheinkopf and M. Timothy O'keefe studied the diffusion of the news of Eagleton Affair.

These studies has contributed to our knowledge on such points as which media provide initial and supplementary information, how long it takes for the news to flow to various segments of the population or total population, and what role personal source plays in news diffusion process. It was Deutschmann and Danielson who first suggest that the diffusion process was a regular process. They have compared the diffu-

* 慶應義塾大学文学部助教授

sion of three news diffusion process, and integrated their findings with earlier diffusion studies.

The conclusion of this comparison was that "the diffusion process was far more regular than we suspected."

Some of the regularities suggested by them were the following;

1. Time of day, nature of the story and other factors do not seem to alter the gross results very much.

2. The diffusion curves follow about same pattern.

3. Television plays a major role in delivering important news, with radio ranking second, and newspapers tended primarily to supplement the broadcast reports.

But, with respect to these regularities of the diffusion process, modification must be introduced. These regularities are influenced by impact of news or news value of the story.

The direction of this influence is suggested by Hill and Bonjean as the following;

1. The greater the news value of an event, the more important will be interpersonal communication in the diffusion procees.

2. The greater the news value of an event, the more rapid will be the diffusion.

However, it seems that news value factor influences not only the diffusion speed and channels by which news reaches to the public, but also the degree of the knowledge gap between socioeconomic segments of the population.

It appears that socio-economic segment differences with respect to the information level, that is knowledge gap, tend to be decreased in the case of diffusion of a event of great news value.

Thus, news value factor can be considered to be the very important factor in the news diffusion process.

But, It seems that the way how news value factor operate on the news diffusion has not yet been explained. A tentative model of the process by which news value factor opertes on the news diffusion is suggested in this article. 序

新聞, ラジオ, テレビなどのマス・メディアによって, さまざまなニュ ース情報が毎日送り出されているが、このようなニュース情報が、いかに 人々の間に普及していくかについて、今日までに多くの研究が行なわれて きている。例えば、ニュース情報普及プロセス研究における最初の研究で あると思われるルーズベルト大統領の死亡のニュースを扱った Delbert C. Miller (1945) の研究, クフト上院議員の死亡のニュースを扱った Otto N. Larsen と Richard J. Hill (1954)の研究, ケネディ大統領の 暗殺事 件の Bradley S. Greenberg (1964 a) の研究, および Richard J. Hill と Charles M. Bonjean (1964) の研究, 最初の 心臓移植手術のニュース の M. Timothy O'keefe (1969) の研究, パウロ六世の回状のニュースの John B. Adams とその他(1969) の研究, 6 つの暗殺事件についてのニュ ースを扱った Sheldon G. Levy (1969) の研究, 不幸な ニュースを扱う ことが多い中で、ハッピーなニュースを扱っている点でも特色のあるトル ドー首相の 結婚の ニュースの Asgar Fathi (1973)⁽⁸⁾の研究, 民主党大統 領候補マグガバンのパートナーの副大統領候補イーグルトンの副大統領候 補辞退事件を扱った K. G. Sheinkopf と M. Timothy O'keefe (1973) の研究, ウオレスが射たれたニュースの Thomas M. Steinfatt とその他 (1973) の研究などがある. これらの研究によって, ニュース情報の普及 の仕方や、マス・メディアやインターパーソナル・コミュニケーションの 役割などが明らかにされてきているが、ニュース情報の普及がかなりの程 度、規則的に行なわれることを主張し、ニュース情報普及におけるいくつ かの規則性を明らかにしたのは、Paul J. Deutschmann と Wayne A. Danielson (1960) である. 彼らは, ランシング (ミシガン州) における アイゼンハワー大統領の脳出血のニュースの普及、ランシングとマジソン (ウイスコンシン州) とパロアルト (カルフォニア州) の三都市における人

工衛生 Explorer 1 号打上げのニュース, そして ランシングとマジソンに おけるアラスカの州昇格のニュースの普及プロセスを調査した. そして, それらの結果と, D. C. Miller のルーズベルト大統領の死亡のニュース, Otto N. Larsen と Richard J. Hill のタフト上院議員の死亡のニュース, Edward Harmuy その他による スプートニクのニュース, Wayne Danielson のアイゼンハワーの出場声明のニュースなどの普及研究によって得ら れた諸結果を比較しながらニュース情報の普及プロセスについて検討を加 えている.

まず,ニュース情報普及のスピードの問題である.彼らが調査した三種類のニュースは,ルーズベルト大統領の死亡のニュースにおいて見られたような瞬時的な普及ではなく,三種類のニュースとも,ほぼ同じような普及曲線を描きながら,ニュースが報道されて二日目になって90%台の普及率に到達している.ルーズベルト大統領の死亡のニュースの時のような,

「口頭コミュニケーションによる急速な普及」(rapid "word of mouth" diffusion) は見られなかったのである. Deutschmann らの指摘を待つま でもなく、ルーズベルト死亡のニュースはきわめて急速に普及したニュー スであった. Delbert C. Miller は、オハイオ州のケント市にある州立ケ ント大学の学生を対象に調査し、ニュースが報道されて10分以内に、口頭 コミュニケーションによって他の人々にそのニュースを知らせる積極的な コミュニケーションによって他の人々にそのニュースを知らせる積極的な コミュニケーション行動が生じ、半時間以内に90%の学生にこのニュース が普及したこと、143人のサンプルのうち、122人が口頭コミュニケーショ ンによって、16人がラジオによってそして3人が電話で、そのニュースを 知ったことを報告している. ところで、Deutsehmam ちは、これら 三種 類のニュースの普及において、ルーズベルト死亡のニュースのようなきわ めて急速な普及が行なわれなかったことについて、次のように述べてい る. すなわち、Millerの研究の場合、対象者が大学生であり、それ故、彼 の研究の対象者は同質的で、かなりの空間的接近性があり、そして、相互 に多くの人々との接触を持つという行動パタンを持っている人々であった のである.また,ルーズベルトの死亡のニュースはきわめて衡撃的であっ たのである.これに対して,この三種類のニュースの普及の研究は,空間 的に広範囲に分散し,大学生に比べて相互の接触が少ない,さまざまな年 令や職業からなる一般の人々によって構成されている異質的な人々を対象 に行なわれたものであると指摘し,これらが,その理由であることを示唆 している.要するに,ルーズベルトの死亡のニュースがきわめて瞬時的な 普及を見せたのは,それが大きなインパクトを持ったニュースの大学生と いう相互の持触がきわめて多い同質的な人々の間における普及であったか らではないかということである.

次は、人々がニュースをはじめて知る時の情報源の問題であるが、彼ら は、まず対面的コミュニケーション (face-to-face communication)の役 割について検討している.この三種類のニュースの普及においては多少の ちがいはあるが、どのニュースにおいても、どの都市はおいても一様にパ ーソナル情報源の比率は低い.

彼らによると、マス・メディア・システムがアメリカほど発展していな かったチリのサンチャゴにおける Eduardo Harmuy とその他によるスプ ートニクのニュースの普及においても同様な結果が示されたということで ある. さらに、彼らはこれら三種類のニュースにおけるパーソナル情報源 の割合を比較している.アイゼンハワーの脳出血と人工衛星 Explorer I 号のニュースにおいては全サンプルの18%の人々がパーソナル情報源から そのニュースをはじめて知ったのに対して、アラスカの州昇格のニュース においては6%であった.このことから、彼らは、パーソナル情報源の割 合は、そのニュースのニュース・バリュー (News Value) が小さい時、低 くなるのではないかとしている. しかし、いずれにしても、三種類のニュ ースともパーソナル情報源の比率が低かったわけであるが、このことは、 これら三種類のニュースの普及は、主としてマス・メディアによって行な われたことを意味する.このマス・メディアの中では,テレビが最も高い 割合を占め,次でラジオが重要であることが明らかにされている.そして 彼らは,ニュース情報普及におけるこのような電波媒体の重要性は,タフ トの死亡のニュースやアイゼンハワーの出場声明のニュースにおいても発 見されたことであると述べている.

彼らは、さらに、ニュースの報道時刻と情報源との関係や付加的情報の 獲得行動を分析し、ニュースが報道された時刻は人々がニュースを知る時 の情報源のあり方に影響を与えないこと。新聞が付加的情報の情報源であ ることなどを明らかにした。

かくして、Deutschmann と Danielson はニュース・バリューと対象者 特性によって、それらが変化するかもしれない可能性を一方で示唆しなが らも、以上のような検討を通じて、ニュース情報の普及プロセスは、考え ていた以上に規則的なものであると思われるとして、次のような規則性が 存在することを明らかにした.すなわち、①ニュースが報道された時刻、 ニュースの内容特性などは普及のあり方をそれ程変えない.②普及曲線は 同じパタンに従う.③ニュース普及 に おい て、テレビが主要な役割を果 たし、次でラジオが重要である.④新聞は主として放送メディアの報道に 対する付加的情報源である.

I. ニュース・バリュー要因と普及パタン

このように、Deutschmann と Danielson は、ニュース情報の普及プロ セスに関して、いくつかの規則性を提示した.しかし、彼らは、すでに見 てきたように、三種類のニュースの普及プロセスとそれ以前の他の研究者 による諸研究との比較検討の過程で、これらの規則性に関して、バリエー ションの存在を発見している.例えば、これらの規則性の枠内における小 さな変動であったが、パーソナル情報源の占める割合はニュース・バリー が小さい程、低くなったのである.そして、これらのバリエーションをも たらす要因として、ニュース・バリューと対象者の特性(同質性---異質 性,相互の接触パタン)を示唆していたのである.そうであれば,もし, これらの要因が大きく変わった時、ニュース情報の普及パタンは、Deutschmann らによって提示された規則性とは異なったものになるのではない かと考えることができる. このような考え方に立って、Deutschmann ら によって提示された規則性がどのような場合にあてはまり、いかなる場合 に大きく異なってくるのかを検討したのが, Richard J. Hill と Charles M. Bonjean (1964) の研究である. 彼らは, Deutschmann らの規則性を 検討する時、ニュース・バリュー要因が最も重要な要因であると考え、ニ ュース・バリューがきわめて高いニュースの場合、これらの規則性がどう なるかを検討したのである、このような研究目的のためには、きわめてニ ュース・バリューが高く、インパクトが強いニュースが選択されなければ ならないが,彼らは、ケネディ暗殺事件のニュースを選択し、暗殺事件が行 なわれたダラスでそのニュースの普及プロセスを調査した. Deutschmann らが調査した三種類のニュースに比較してニュース・バリューが大きいこ のニュースの普及プロセスはいかなるものであったであろうか、まず、普 及のスピードである. ケネディ大統領の暗殺事件のニュースは非常に急速 に人々の間に普及した. すなわち, 報道されてから, 1時間以内に92.8%の 人々がその事件を知ったのである.これは,すでに見てきたルーズベルト大 統領の死亡のニュースの場合と類似した普及スピードである. Hillと Bonjean は、この類似性に注目しなければならないと主張する. それは、ルー ズベルト死亡のニュースとケネディ暗殺のニュースの普及プロセスの研究 がきわめて対照的な対象者において、行なわれたからである。すでに見て きたように、Deutschmann らは、 ルーズベルト大統領の死亡のニュース が急速に普及した理由として、調査対象が学生であり、きわめて相互接触 の頻度が高い同質的な人々の間における普及であるからではなかろうと述 べていたが、このケネディ大統領暗残事件のニュースの調査は、さまざま

な特性を持った人々からなるサンプルで行なわれているのである.

かくして, Hill と Bonjean は, この結果からニュース情報の普及のスピ ードは, 調査対象者の特性や母集団の特性の関数ではなく, ニュース・バ リューの関数であることが示唆されると述べている.⁽²³⁾ 同様な結果が, 同じ ケネディ大統領の暗殺事件のニュースの普及をカルフォニア州のある都市 における異質的なサンプルにおいて調査した B. S. Greenberg (1964 a) の 研究によっても発見されている. すなわち, ニュースが報道されて1時間 以内に88%の人々に, そのニュースが普及している.⁽²⁴⁾ このように, ニュー ス・バリューが大きくなると, 対象者の特性や母集団の特性のいかんにか かわらず, 普及のスピードは急速になり Deutschmann らの規則性はあて はまらなくなるのである.

次に、人々がニュースを最初に知る時の情報源は、ニュース・バリュー が高くなるとどうなるであろうか. Deutschmann らの規則性は、 マス・ メディアの占める割合が高く、パーソナル情報源の割合はきわめて低いと いうことである.ところが、ケネディ事件の場合、そのニュースをはじめ て知った時の情報源のうちで最も多かったのは、パーソナル情報源であ る. すなわち、57.1%の人がパーソナル情報源によって、その事件を知っ たのである.次でテレビが25.9%, ラジオが17.0%の順である. 同様な傾 向が, B.S. Greenberg によっても発見されている. これらは, ルーズベル ト大統領の死亡の場合のパーソナル情報源から知った人が87.4%であった ことと比較すると少ないが、これらのデーターは、インターパーソナル・ コミュニケーションの重要度は、ニュース・バリューの大きさと直接関連 していることを示唆しているのである. このように, Hill と Bonjean は ケネディ大統領暗殺事件のニュースのダラスにおける普及を調査し、ニュ ース・バリューが大きいニュースの場合, Deutschmann と Danielson に よって提出された規則性はどうなるかを検討した。そして、その結果から ニュース・バリュー要因に関連して, Deutschmann と Danielson の規則 哲学第73集

性に対する修正の必要性を次のように述べているのである.

① 普及のスピードは、同程度のニュース・バリューのニュースにおいては同じパタンに従う.しかしながら、異なったニュース・バリューのニュースにおいては異なった普及曲線が描かれる.普及のスピードを規定する要因としては、サンプル特性よりも、ニュース・バリューが重要な要因である.

② テレビは, 普通程度の重要性のニュースの普及において主要な役割 を果たす.しかし, 非常に重要なニュースの時は, インターパーソナル・ コミュニケーションが最も重要となる.

このように、ニュース・バリューが大きくなると、ニュース情報の普及 スピードが急速になり、そしてパーソナル情報源の重要性が高くなってく るのである. なお、ニュース・バリューが大きくなるとパーソナル情報源 の割合が高くなるということは、Bradley S. Greenberg (1964b) の研究 によっても支持されている.

Ⅱ. ニュース・バリュー要因と知識ギャップ

広範な伝達能力を持っているマス・メディアによって報道されたニュー スであっても、ニュース情報がある人々には多く普及して、よく知られて いるのに、他の人々の間では普及率が低いということがある。あるいは、 ある人々は、そのニュースを早く知るが、他の人々は、それよりもずっと 遅くなって知るということがある。このような差異は、ニュース情報の普 及研究においては、社会・経済的特性や教育程度のちがいなどによって、 捉えられているが、いくつかの研究によって社会・経済的階層や教育程度別 にニュース情報に関して、知識ギャップ(Knowledge gap)が存在してい ることが明らかにされてきた。すなわち、社会・経済的階層や教育程度別 にニュース情報の普及率や普及水準などが異なっていることが発見されて いる。ところで、ニュース情報に関して、この知識ギャップの問題にアプロ

ーチしている研究の中で、最初の研究の一つは Otto N. Larsen と Richard J. Hill によって行なわれたタフト上院議員の死亡のニュースの普及研究で あろう. Otto N. Larsen と Richard J. Hill は、社会階層のちがいによっ て、メディアや情報内容への接触の仕方が異なっているであろうと考え た.そして,一般的に社会的問題などの堅い情報内容への接触は教育程度 や経済的地位が高い程,多くなるであろうと考えたのである,すなわち, 教育程度や経済的地位が高い人々の方が、そうでない人々に比べて、社会 的事件についてのニュースを知っている人の割合(普及率)が高いという ことである.このような仮説を検討するために,彼らはタフト上院議員死 亡のニュースの研究を行なうにあたって、明らかに対比的な二つの母集団 を設定した. その一つはワシントン大学 (University of Washington) の 大学教員住宅地域の住民である. もう一つは, シアトル市の工業地域の近 くにある低家賃住宅計画に基いて建てられた住宅地域の人々である、この 地域の人々は工場労働者でいろいろな人種の人々から構成されている.家 賃は前者に比べてかなり安い. この二つの地域を比較すると, 前者の方が 社会・経済的階層と教育程度において高いことになる. では, この二つの 地域におけるタフト上院議員の死亡のニュースの普及率はどうであったで あろうか.結果は、彼らの予想とは反対に大学教員住宅地域が88%、低家 賃住宅地域が93%の普及率であった。しかし、この調査には、問題があっ たのである.大学教員住宅地域における調査は事件が報道されてから24時 間後に行なわれたのに対して、労働者住宅地域では3日後に行なわれてい るのである.労働者住宅地域では、大学教員住宅地域に比べると1日半か ら2日後に調査が行なわれたことになる.このような方法上の問題からこ の仮説をテストすることは不可能であったが、この普及率と教育程度や社 会階層との関係を明らかにしたのは、 P. J. Deutschmann と Wayne A. Danielson (1960) や, Richard W. Budd とその他 (1967)の研究である. Deutschmann と Danielson はすでに述べたように三つのニュースの調査

結果とそれ以前の研究結果を比較検討し、ニュース情報の普及プロセスに おける規則性を発見しているが、その研究の中で、ニュースを知っている 人と知らない人々との間に、どのようなちがいがあるか検討している.彼 らによれば、それは教育程度と職業である。

表1に示されているように、大学卒(中退も含む)における普及率は98 %で、それに対し、ハイ・スクール卒およびそれ以下の教育程度において は90%の普及率である。教育程度の高い人々においての方がニュースを知 っている人の割合が高いのである。職業について見てみても、ホワイト・ カラーが96%の普及率であるのに対し、ブルー・カラーにおいては92%の 普及率である。教育程度と普及率との関係については Richard W. Budd らも検討を加えている。Budd らは、1964年10月14日のウオルター・ジェン キンス (Walter Jenkins)の逮捕のニュースと10月15日のソビエト連邦首 相フルシチョフの失脚のニュースの普及プロセスにおいて、この問題を分 析している。この調査はアイオワ・シティの成人を対象に行なわれたが、 対象サンプルの教育程度の構成は次のとおりであった。すなわち、39%の

an an an Arran an Arr	大卒(中退も含む)	ハイ・スクール卒お よびそれ以下の教育 程度
知っている 知らない	98% 2% 100% (N274)	90% 10% 100% (N528)
	ホワイト・カラー	ブルー・カラ・
知っている 知らない	96% <u>4%</u> 100% (N366)	92% 8% 100% (N355)

表1 ニュース普及率と教育程度・職業

※5%水準で有意差

出所: Paul J. Deutschmann and Wayne A Danielson, Diffusion of Knowledge of the Major News Story. Journalism Quarterly 37. 1960. p.349.

人々がハイ・スクール卒ないし、それ以下の教育程度、36%の人々が大学 卒,もしくは、いくらか大学教育を受けた人々であった.残りの25%の人々 が大学院卒もしくは、大学院の課程にあった人々である.彼らは、教育程 度に関するこの三つのグループの普及率を比較したわけであるが、ジェン キンス事件について見てみると、大学院グループにおいては普及率は約97 %、大学グループは約73%の普及率、ハイ・スクール・グループ(それ以 下の教育程度も含む)は約62%であった.すなわち、教育程度が高い程、 普及率が高いことが示されている.

また,フルシチョフ事件を見てみると,大学院グループの普及率は100 %,大学グループが約81%,ハイ・スクール・グループ(それ以下の教育 |程度も含む)は約72%の普及率であった.このように両事件とも,教育程 度が高い程, 普及率が高くなることが示されているのである. また, John B. Adams とその他によっても同様な結果が発見されている. すなわち, 彼らは、 ローマ法王パウロ6世の回状のニュースの普及プロセスにおい て、教育程度の高い人々においての方が、低い人々におけるよりも普及率 が高いことを発見している.このように職業と普及率,教育程度と普及率 との間に関係があることが明らかにされたのである.すなわち,職業階層 や教育程度別に知識ギャップが存在しているということである.しかし, あらゆるニュース情報の普及において、このような知識ギャップが存在す ると考えるのは決して妥当ではない.知識ギャップの減少に関して, B.K. L. Genova と Bradley S. Greenberg (1979) は、情報を送り出す期間が 長ければ長い程、知識ギャップは減少するであろうとしているが、ニュー ス・バリューの大きいニュースの場合もこの知識ギャップは減少する.例 えば、ケネディ大統領の暗殺事件のように、非常にニュース・バリューの 高いニュースの場合には、きわめて短期間のうちにほとんど100%の人々 に普及するわけであるから、知識ギャップは存在しなくなる. もちろん, このような知識ギャップの減少は、人々のメディアや情報内容への接触行 動が変化したからというよりも、送り手であるマス・メディアの送り行動 の活発化やすでにそのニュースを知った人の送り行動の活発化によるもの であろう、それはさておき、ニュース・バリューが非常に高いニュースの 場合に,職業や教育程度別の普及率差異がなくなるということは,ニュー ス・バリューの小さいニュースの時には,その差異が大きく,ニュース・ バリューが大きくなると、その差異が小さくなると考えることを可能にす る. この点について, Budd らの研究は, 我々に示唆に富むデーターを提 供してくれている。すでに見てきたように、ジェンキンンス事件において も、フルシチョフ首相の失脚のニュースにおいても、教育程度が高い程、 普及率が高いことが示されていたが、教育程度に関する三グループ相互の 普及率の差異の大きさがフルシチョフ事件よりもジェンキンス事件の方が 大きいのである. 例えば、大学院グループとハイ・スクール・グループとの 間の普及率差異は、ジェンキンス事件では35%であるのに対して、フルシ チョフ事件においては28%である. ところで, この二つのニュースのニュ ース・バリューに関して、Budd らはフルシチョフ事件のニュースの方が ニュース・バリューが高いとしている。このことが正しいとするならば、 ニュース・バリューの大きいニュースの方が教育程度別の普及率差異が小 さいことになるのである.したがって,我々は,ニュース・バリューが大 きいニュースほど、知識ギャップは小さくなり、きわめてニュース・バリ ューの高い衝撃的ニュースの場合にはほとんど存在しなくなると仮説する ことができよう.いいかえるならば、ニュース情報における知識ギャップ は、それほど衝撃的ではないニュースやニュース・バリューがそれほど高 くないニュースの場合に存在し、かつニュース・バリューが小さい程、そ の度合も大きいと仮説することができよう.

Ⅲ. ニュース・バリュー効果のプロセス

すでに見てきたように, Deutschmann と Danielson によって提出され

(91)

たニュース情報の普及についての規則性は、彼らが扱ったニュースに比べ て、ニュース・バリューがきわめて高いルーズベルト大統領やケネディ大 統領の暗殺のニュースの普及においては、あてはまらない、すなわち、ニ ュース・バリューがきわめて高くなると、普及のスピードは非常に急速に なり,そして大部分の人は,そのニュースをパーソナル情報源を通して最初 に知るのである. また, 逆に, Deutschmann と Danielson が扱ったアイ ゼンハワー大統領の病気、人工衛星 Explorer I 号、アラスカの州昇格のニ ュースようもニュース バリューが低いニュースにおいては, J. B. Adams とその他がパウロ6世の回状のニュースの普及プロセスの研究において明 らかにしているように、そのニュースがマス・メディアによって報道され ている場合、パーソナル情報源の割合はきわめて低く、そして普及のスピ ードもきわめて遅い. すなわち, パーソナル情報源の割合 は2% にすぎ ず、そして報道されて数日を経ても、約半数にしか普及していないのであ (40) る. このように, ニュース情報のニュース・バリューが大きければ, 大き い程,人々が最初にニュースを知る時の情報源に占めるパーソナル情報源 の割合が大きくなる.そして,特にニュース・バリューが高い時,パーソ ナル情報源の割合はマス・メディアよりも大きくなるのである.

普及のスピードについても同様である.しかし,ニュース情報のニュー ス・バリューが大きくなると,どのようなメカニズムによってパーソナル 情報源の割合が増加し,普及のスピードが急速になり,普及率が100% に 近づいていくのであろうか.この問題を考えるためには,われわれはま ずニュース情報の普及プロセスの基本的特性を検討しなければならない. まず第一に,個々のニュース情報は基本的に,受け手にとって非予知的な 情報であるということである.誰がケネディ大統領暗殺のニュースがその 時刻に報道されることを予知して,そのニュースに選択的に接触し,初め てその事件を知ったであろうか.誰がトルドー首相の結婚のニュースがそ の時刻に報道されることを前もって知っていて,その事件を初めて知るた めにメディアに選択的に、積極的に接触していたであろうか、そのような 人は誰もいないのである.マス・メディアが送り出している他の情報,例 えば、ラジオやテレビのドラマや映画、バラエティショー、新聞や雑誌の |連載少説などのように受け手にとって予知性のある情報ではな い の で あ る.予知性のあるラジオやテレビ番組などにおいては、この番組に関心が あるから選択的に接触するということがしばしば見られることである.し かし、ニュース情報においては、その事件に関心があるからそのニュース に接触し、初めてその事件について知るということは基本的にあり得ない ことである。したがって、基本的に言って、人々が個々のニュースを初め て知る時には,その個々のニュースに対する人々の関心や興味ということ は全く無関係である.もちろん,その事件を知ったあとで,その事件をさ らに詳しく知るためにメディアやニュース報道に接触する時や、他の人々 とその事件について話しをする時には、その個々のニュースに対する人々 の関心や興味が要因として働くことはいうまでもない、第二に、人々はあ る一定の生活行動パタンを持ち、そして、その一環としてマス・メディア やパーソナル情報源に対する接触パタンを持っているということである. すなわち、人々は生活行動パタンに規定されながら、また、一般的な情報 内容への関心から、ある時間帯には、あるメディアや情報源との接触を持 ちがちであるとか、ある時間帯(例えば勤務時間帯)にはあらゆるマス・ メディアとの接触を持たないといったメディア接触パタンを持っているの である.そして,このメディア接触パタンは,生活パタンのちがいをもた らす職業や年令などによって異なっているはずである.ともかく、われわ れはそれぞれの生活パタンに規定されながら、生活時間軸上にマス・メデ ィアやパーソナル情報源に対する接触パタンを型づくっていると考えるこ とができる、ところで、先に述べたように、ニュース情報は基本的に非予 知的な情報である.それ故,マス・メディアがある一定の仕方で,ある事 件を報道した時、どのような人々がその報道されたニュースを知るのか、

どのくらいの数の人がそのニュースを知るのか、また、どのメディアから そのニュースを知るのかは第一次的にはその時の人々のメディア接触パタ ンに依存することになる、すなわち、ある事件をマス・メディアがある仕 方で(報道の頻度,時間帯,報道を行っているメディアの数と種類)報道 した時,それを所与とするならば,そのニュースを知る人のタイプ,数, そして情報源は,第一次的には人々のメディア接触パタンに依存して決ま ることになる、より一般的に言えば、あるニュースを知る人々のタイプと 数と情報源は、第一次的にはマス・メディアのその事件に関する情報の送 り行動のあり方と,人々のメディア接触パタンによって決まるのである. そして,第二次的にはマス・メディアを通してニュースを知った人がその 後,どのような行動をとるかということによって,ニュース情報の普及率 や人々の情報源のあり方が規定されてくる. すなわち, 事件を 知 っ た 人 が,他の人々にそのニュースについてどのくらい話をするのかということ である。その事件について知った人が他の人々にその事件について話しを すると、マス・メディアとの接触を持たなかったため、その事件を知らな かった人もそのニュースを知ることになり普及率が上がるのである。そし て、人々がニュースを最初に知る時の情報源の構成も変化してくる。もち ろん、すでにそのニュースを知っている人からその事件について話しを聞 くことができるチャンスは、その人とコミュニケーション・ネットワーク を持っている人や接触の多い人ほど大きい、したがって、すでにそのニュ ースを知っている人から、そのニュースについて話を聞いたり、知らされ たりする人のタイプや数は、人々がどのようなパーソナル情報源に対する 接触パタンを持っているかによって影響されるであろう、それ故、最終的 にあるニュースを知る人のタイプや数(普及率,普及スピード),そして情 報源は第一次的にはそのニュースに関するマス・メディアの送り行動と人 々のメディア接触パタンのあり方によって決定され、第二次的には、その ニュースを知った人の行動と人々のパーソナル情報源に対する接触パタン

哲 学 第 73 集

に依存することになる. すなわち, マス・メディアの送り行動と人々のメ ディア接触パタン, そしてニュースを知った人の行動と人々のパーソナル 情報源と対する接触パタンのあり方が変化すると, ニュース情報の普及の スピードやニュースを最初に知る時の情報源が変化するという こ と で あ る. このようなニュース情報普及の基本的プロセスをふまえて, ニュース 情報のニュース・バリューが変化すると, 普及スピードや情報源がどのよ うにして異なってくるのかを見てみよう.

先に指摘したように、ニュース情報は基本的に非予知的なものである. したがって,そのニュースが,ニュース・バリューの低いニュースであっ ても,高いニュースであっても,そのことは人々のメディア接触パタンに 直接的、即時的には何ら影響を与えない、人々のパーソナル情報源に対す る接触パタンについても同様である.そもそも、そのニュースを知らなけ れば、ニュース・バリューが高いものであっても、そのニュースは重要で 関心のあるニュースであるからといって,メディア接触パタンを変化させ てでも、そのニュースの報道に接触するということはあり得ないことであ る.人々のメディア接触パタンは,そのニュースを知る以前においては, 個々のニュース情報のニュース・バリューの高低によっては変化しない。 むしろ,ニュースのニュー・スバリューの大きさは,マス・メディアのニュ ース情報の送り行動に影響を与えるであろう.ニュース・バリューの高い ニュースの場合はマス・メディアは通常の送り行動パタンを変更し、頻度 をふやしたり、数多くの、または多くの種類のマス・メディアがそのニュー ス情報を報道するようになるであろう.ニュース・バリューが低い時は, その逆である.ニュース情報普及の第一次プロセスにおいては,そのニュ ースの普及スピードや情報源のあり方は,そのニュースについてのマス・メ ディアの送り行動と人々のメディア接触行動によって規定されてくるわけ であるが、ニュース情報が受け手によって非予知的であるかぎり、ニュー ス・バリュー要因の効果は、マス・メディアの送り行動に影響を与え、それを

(95)

変化させることを通じて行なわれるということになる.人々のメディア接 触パタンが変化しなくても、ニュース・バリューが高い時にはマス・メディ アは送り行動の頻度を高めるので、人々がそのニュースを知る確率は高ま り, 普及スピードが急速になる. 人々の所与のメディア接触パタンにおい ても、マス・メディアの送り行動が変化すると普及スピードや普及率が変 化するのである.さて、ニュース情報普及の第二次プロセスは、ニュース を知った人々が他の人々にその事件について話をする行動によるものであ る. Deutschmann と Danielson も発見しているように,ある事件を知っ た人が、その事件について他の人々に話をする行動はそのニュースのニュ ース・バリューと関連している. ニュース・バリューの高いニュースの 時, そのニュースを知った人はそれについて他の人々に話をする. 表-2 は、ニュースを知った人のうち他の人々にそのニュースについて話した人 の割合をいろいろなニュースにおいて見たものである. これらのニュー スのニュース・バリューは、Richard J. Hill と C. M. Bonjean, Paul J. Deutschmann と Wayne A. Danielson, J. B. Adams とその他に従 えば、ケネディ大統領の暗殺事件が最も高く、次でアイゼンハワーの病気, 人工衛星 Explorer I 号, アラスカの州昇格, そしてパウロ6世の回状が 最も低いニュースということになる. そうであれば, 表-2に示されてい

ケネディ大統領暗殺	98%			
(B. S. Greenberg, 1964)				
アイゼンハワーの病気	76%			
人工衛星 Explorer I号	68%			
アラスカの州昇格	54%			
(P. J. Deutschmann & W. A. Danielson, 1960)				
パウロ6世の回状	27%(カトリック教徒)			
(J. B. Adams & Others, 1969) 13.6%(非カトリック教徒)			

表2 他人にそのニュースについて話した人の割合 (%)

(96)

哲 学 第 73 集

るようにニュースを知った人が他の人々にそのニュースについて話しをす る割合は、そのニュースのニュース・バリューが大きければ大きいほど高 くなるのである.そして,ニュース・バリューが小さいニュースの場合. その割合は小さくなる。ニュースを知った人がその事件について他の人々 に話をすることは、人々がパーソナル情報源から、そのニュースを初めて 知るための前提である.ニュースを知った人が、他の人々にそのニュース のことを話すことによって、マス・メディアのある送り行動とその人のメ ディア接触パタンのもとでは、その事件を知ることができなかった人々や もっと遅れて知ることになったであろう人々にそのニュースが伝わるので ある.このように、ニュース・バリューが高ければ高いほど、他の人々にそ の事件について話をする行動が活発になり、普及の第一次プロセスではま だその事件について知らないでいた人々にそのニュースを知らせるのであ る.そして、ニュース・バリューがきわめて高いニュースの場合は、他の 人々に話をする人の割合が高くなるだけではなく、日常のパーソナル、コ ミュニケーション・ネットワークを越えて、日頃、話をしたことのない人 にまでその事件について話をするようである. B. S. Greenberg (1964 a) の研究によって、見知らぬ人からケネディ大統領暗殺のニュースを知っ た人の存在が明らかにされている. このように, ニュース・バリューが高 い時、普及の第二次プロセスは活発化し、普及率や普及スピードを高め、 パーソナル情報源からの事件を知る人の割合が増加するのである.以上の ように、ニュース・バリューが高い場合は、普及の第一次プロセスにおい ては、マス・メディアの送り行動の変化を通じて、そして第二次プロセス においてはそのニュースを知った人の送り行動の活発化によってニュース の普及率が高まり、普及スピードも急速になり、そして、パーソナル情報 源が果す役割も大きくなるのである. ニュース・バリューが低いニュース の場合は、第一次プロセスにおけるマス・メディアの送り行動がより低下 し、またニュースを知った人々はほとんど他の人にはそのニュースについ

て話をしないようになる.この時は,ニュース情報の普及は基本的にマス ・メディアから人々へというように一段階的流れになる.ところで,すで に見たようにきわめてニュース・バリューの高いルーズベルト大統領の死 亡やケネディ大統領の暗殺事件の場合には,パーソナル情報源から初めて その事件を知った人の方が,マス・メディアから初めて知った人よりも多 い.

ニュースを知った人の送り行動が活発化するだけでなく、マス・メディ アの送り行動も活発になるにもかかわらず、このような傾向が示されるの は、パーソナル情報源とマス・メディアのそのニュースに対する受け手創 造能力の差によるものであると仮説することができよう、マス・メディア が送り行動を活発化しても、その効果はあくまでも受け手のメディア接触 パタンを通してあらわれるものである.いくら、マス・メディアが送り行 動を活発化しても、メディアに接触していない人にはその事件について知 らせることができない、また、メディアに接触していない人をメディアに 接触させることができないのである.一方,パーソナル情報源は人々の情 報源接触パタンや生活行動パタンを変化させ,自分が送り出しているメッ セージに対する受け手を造り出す能力を潜在的に持っている. 例えば, 眠 っている人をたたき起して話をするとか、仕事中の人に話しかけてニュー スを知らせるとか、他の人々と話しをしている所にわりこんで事件を知ら せることなどである.これらの潜在的能力は通常の場合,社会規範や社会 的制約もしくは、その他の制約条件の下におかれているが、大事件の場合、 それらの制約条件の力が弱まり、この潜在的能力が発揮されるのであろう.

注

- Delbert C. Miller, A Research note on Mass Communication, American Sociological Review 10, Oct. 1945.
- (2) Otto N. Larsen and Richard J. Hill, Mass media and Interpersonal Communication in the Diffusion of A News Event. American Sociol-

gical Review 19, 1954.

- Bradley S. Greenberg, Diffusion of News of the Kennedy Assassination, Public Opinion Quarterly vol 28 1964 a.
- (4) Richard J. Hill and Charles M. Bonjean, News Diffusion: A Test of the Regularity Hypothesis, Journalism Quarterly 41, 1964.
- (5) M. Timothy O'keefe, The First Human Heart Transplant: A Study of Diffusion Among Doctors, Journalism Quarterly 46, 1969.
- (6) John B. Adams, James J. Mullen and Harold M. Wilson, Diffusion of a "Minor" Foreign Affairs News Event, Journalism Quarterly 46, 1969.
- (7) Sheldon G. Levy, How Population Subgroups Differed in Knowledge of Six Assassinations, Journalism Quarterly 46, 1969.
- (8) Asgar Fathi, Diffusion of a 'Happy' News Event, Journalism Quar terly 50, 1973.
- (9) Kenneth G. Sheinkopf and M. Timothy O'Keefe, The Eagleton Affairs: A Study of News Diffusion, Paper presented to the Mass Communication Division of the International Communication Association, Montreal, Canada, 1973.
- (10) Thomas M. Steinfatt and Others, "The George Wallace Shooting: News Diffusion and Sleeper Effect" Paper Presented at International Communication Association, Montreal 1973.
- (11) Paul J. Deutschmann and Wayne A. Danielson, Diffusion of Knowledge of the Major News Story, Journalism Quarterly 37, 1960.
- (12) ibid, p. 347.
- (13) Delbert C. Miller, Op. cit p. 691-692.
- (14) Deutschmann and Danielson, op. cit. p. 348.
- (15) ibid, p. 350.
- (16) ibid, p. 350-351.
- (17) ibid, p. 350.
- (18) ibid, p. 351.
- (19) ibid, p. 351.
- (20) ibid, p. 353.
- (21) ibid, p. 355.
- (22) Hill and Bonjean, op. cit. p. 337. The second state state the masses
- (23) ibid, p. 338. In additional languages and languages of the property of the second s

(1991):

- (24) Greenberg, op. cit. p. 227.
- (25) Hill and Bonjean, op. cit. p. 338-339.
- (26) Greenberg, op. cit. p. 227.
- (27) Hill and Bonjean, op. cit. p. 339.
- (28) ibid, p. 342.
- (29) Hill と Bonjean も, 仮説という型で, ニュース・バリュー要因の影響について同様に述べている. ibid, p. 342.
- (30) Bradley S. Greenberg, Person to Person Communication in the Diffusion of News Events, Journalism Quarterly 41, 1964 b. p. 492-493.
- (31) Otto N. Larsen and Richard J. Hill, op. cit p. 426-427.
- (32) ibid, p. 427.
- (33) ibid, p. 427.
- (34) Richard W. Budd, Malcolm S. Maclean Jr, and Arthur M. Barnes, Regularities in the Diffusion of Two major News Events, Journalism Quarterly 43, 1966.
- (35) Deutschmann and Danielson, op. cit. p. 349.
- (36) Budd and Others, op. cit. p. 228-230.
- (37) Adames and Others, op. cit. p. 550.
- (38) B. K. L. Genova and Bradley S. Greenberg, Interest in News and the Knowledge Gap, Public Opinion Quarterly 43, 1979. p. 88.
- (39) Budd and Others, op. cit. p. 223.
- (40) Adams and others, op. cit. p. 548.
- (41) Deutschmann and Danielson, op. cit. p. 353-354.
- (42) Hill and Bonjean, op. cit. p. 337.
- (43) Deutschmaun and Danielson op. cit. p. 354.
- (44) Adams and others, op. cit. p. 546.
- (45) ニュース・バリュー要因は、ニュース普及プロセス研究にとってきわめて重要な変数でありながら、ニュース・バリューの判定はこのように研究者の任意的判断によって行なわれている.この点はニュース情報普及プロセス研究にとって、今後の大きな課題である.
- (46) 他人に、そのニュースについて話した人の割合については、 Greenberg、(1964 a) op. cit. p.230.
 Deutschmann and Danielson, op. cit. p. 354.
 Adams and Others, op. cit. p. 354.
- (47) Bradley S. Greenberg (1964 a), op. cit. p. 229.